


2019 年度「FDを推進するための活動補助」報告書

札幌学院大学 学長 殿

2020 年 3 月 23 日

(申請者名) 斉藤 美香 	(複数で申請の場合、参加教員の氏名) (印)
(科目名) 臨床心理応用ゼミナール・ 遊戯療法	(印)
<p>(取組の趣旨、実施計画、今年度の達成目標)の報告</p> <p><趣旨></p> <p>本学では、発達障がい、精神障がいをもつ学生が一定程度在学しており、今後も増加することが予想される。そのような学生の特性として、参加型の授業やプレゼンテーションを行うことが苦手である場合が多い。一方でアクティブ・ラーニングによる授業も増加している。また、診断がなくても、人前で話し、発表するのが苦手な学生もいる。これまで、欠席過多になり休退学に至る学生の中には、参加対面発表型授業につまづくことを契機とする者も少なからずいた。障がいをもつ学生への合理的配慮に関しては、障がい特性上、出席が難しい学生への授業保障として、自宅での参加型学習（遠隔授業とスマホ・タブレットを使った参加）を選択肢として開拓することは喫緊の課題である。また、参加対面発言型授業に苦手感を持つ学生に関しても、直接対話ではない方法で参加ができれば、休退学防止にも寄与することが考えられる。これを解決するため、本事業では①授業時のグループワークをスマホを使っての参加とする。② ①に加えて、授業を欠席学生にライブ配信し、チャット機能で双方向とする。これらを各種 ICT 技術を用いて、試行し、本格導入に向けての課題と解決方法を検討することを目標とした。本取組みでは、学生への教育保障や合理的配慮の視点から自宅に居ながら遠隔で参加型の授業が受けられる環境整備の試行を行った。また、本事業申請時には予想していなかったことだが、新型コロナウイルス感染対策のため、アメリカでは直ちに遠隔授業に切り替えた。日本でも東大、京大等は原則遠隔授業に切り替えることが予定されている。将来的にも、通常授業に加えて、緊急時は、いつでも遠隔授業に切り替え、通常授業と同じ質の教育を保証することが大学に求められている。このように、意図しないことであったが、大学全体の教育保証という視点で不可欠な試みとなった。</p> <p><実施計画></p> <p>1. 試行 1：授業中のグループワークに Zoom 導入</p> <p>①2019 年 7 月、臨床心理研究科倫理審査委員会に、本事業（試行 1. 2）に関わる学生への調査研究についての倫理承認を得た。（臨 1907）</p> <p>②臨床心理応用ゼミナール（7/5）のグループディスカッションにて、Zoom を使用しての参加試行を実施した。実施の 2 週間前の授業にて、Zoom 授業の趣旨、準備方法等を説明し、実施とアンケート調査の説明と協力要請をした。実施 1 週間前の授業でも Zoom 設定できない学生への問い合わせに応じた。</p> <p>③当日は、履修学生 26 名中、3 名欠席。14 名の学生は準備不足等の理由で、Zoom を使わず、対面でのディスカッションを選んだ。9 名の学生が Zoom によるディスカッション実施に協力し、アンケートに回答した。</p> <p>2. 試行 2：自宅での Zoom による授業ライブ配信と受講</p> <p>①遊戯療法（12/26：補講）の授業を在宅での受講希望者に Zoom による授業ライブ配信と受講を実施。後期授業開始時から、実施の告知をした。実施、2 週間前から Zoom の設定などを授業中に確認。履修者 6 名全員が授業中にチャット機能を使ったグループディスカッションを行い、実際の体験ができた。</p> <p>②当日は 3 名が大学にて授業を受け、3 名が自宅にての授業参加となった。</p>	

(期待された効果、他の授業科目への適用可能性)の報告

<実施結果>

試行1については、9名中7名がZoomの設定は簡単であったと回答した。映像や音声、チャット画面の見やすさは人によって感じ方がバラバラであるが、教員の映像と音声への評価は良好であった。それに比べて、チャット画面は見づらいと回答した人が多かった。ほぼ全員がチャットでの発言が対面よりも発言しやすいと感じていた。しかし、グループワークとZoomのチャットでの意見の出しやすさについては、対面の方が良い人が3名、Zoomの方が良い人が4名、どちらで変わらない人が2名であった。Zoomの方が良いと回答した人の理由は、自分の考えを整理して話せた。後でも発言が見ることができる。一度に他の人の発言も見ることができるなどが挙げられた。一方、対面の方が良いとした人の理由は、他の人の意見が先にできると意見が言いにくい、意見を順番に聞ける、入力に時間がかかって流れがわからなくなるなどが挙げられた。Zoom授業を自宅で受ける際を想定した時に支障がでると思われることについては、通信の安定性への不安、PCを持っておらずスマホだけの場合の不便などが挙げられたが、体調不良、吹雪などによる交通障害、友達との人間関係が悪くなって学校に行きづらい時には自宅で遠隔授業を受けられることはありがたいという意見があった。

試行2については、全員がZoom設定は簡単であったと回答。映像・音声状態も良好であったが、チャット機能が見づらいという回答が多かった。画面共有のDVD映像やパワーポイント資料も見やすかったという回答であった。当日のパワーポイント資料は事前にポータル経由で学生には配信していたが、ポータルを日常的に見ておらず、配布資料が手元にない学生もいた。試行1と同様にZoomによる遠隔授業のメリットを感じる一方で、自宅だと緊張感がなくなってしまうというデメリットにも言及されていた。

<期待された効果と他の授業科目への適用可能性>

遠隔授業や授業内での対面だけではなく、チャットを通じたグループワーク参加は一定の効果が得られた。しかし、本格的に授業に導入するために以下の課題が見いだされた。これに対応すれば、全ての授業への適用は可能になると考える。尚、使用サービスはZoom以外にもMicrosoft Teamsなど他の選択肢もあるが、全米や国内先進大学の動向をみると、セキュリティがHIPAA (Health Insurance Portability and Accountability Act) に準拠したサービス提供可能なZoomが第一選択肢となると確認された。

[課題]

1. 学生への遠隔授業前の準備授業が想定外に細かく必要。ICTに弱い学生への個別指導も必要。遠隔授業に関する学生のネットリテラシー教育も必要。
2. 教員が遠隔授業に関する法律、通達などを知り、守る。(単位化認定、著作権、ネットセキュリティ、在宅の場合、学生のプライバシーに入っていくことへの配慮と対応) 熟練すること。通常授業に加えて、かなりの時間と労力をかけた授業準備が必要。特に、双方向性をどう工夫するかが重要。全学的に導入するならば、全教員へのFDが必須。
3. 当日のトラブルに備えての準備と周知の徹底。
4. 学生がそもそも、自宅にPCがあり、無制限通信環境やセキュリティなどがあることが前提となるので、遠隔授業に全学生が公平にアクセスして、教育を受ける環境を作ることが必須。
5. 発達障がいなどそもそも、平時の授業でも教員の教示理解が難しい学生は、Zoomの操作の理解や対処も難しいので、個別対応や実施のシミュレーションを複数回行うことが必要。
6. チャットやグループワークでの入力は結局、マルチタスクが必要とされるので、対面と同じ課題は残る。
今回は、チャット機能のみ使ったが、他のサービス(例: google、ロイロノート・スクールなど)のワークシートの共有など、使用ツールの選択と追加が今後の課題である。
今後、遠隔授業の環境整備は障がい学生支援に限ったことではなく、全学生への教育機会の提供サービスの1つとして必須になってくる。大学の総力を挙げての教員研修、サービスやICT環境の整備、ポータルとZOOMなどとのサービスの整合性

(所要経費及び実施時期)の報告

- ・5月にZoom遠隔授業実施に耐えうるスペックのPCを購入。Zoom Proの月ごと契約金として、2か月分(7月実施分は無料期間、12月、予備日として1月分)
- ・1月、調査表の印刷に使ったプリンターインクと調査票等のファイリングとデータ保存のためのクリアファイルとDVD-Rを購入。尚、データ入力のための人件費は履修者が少なかったため、支出無

(執行経費内訳)

・2019/5/7 HP社ノートPC ￥142,128	・2019/12/16 ZOOM 利用料 ￥1,000
・2020/1/8 DVD-R ￥817, クリアブック ￥726	・2020/1/17 ZOOM 利用料 ￥1,000
・2020/1/29 ブラザーインクカートリッジ LC3135BC ￥4,716, LC3135C・LC3135M・LC3135Y 各￥5,871	

合計 168,000 円

記述欄が不足する場合は、拡張して下さい。